News Release

本ニュースリリースは、3 月 24 日 11 時に、
経済産業記者会・経済産業省ペンクラブ・財界記者会・東商記者クラブに配布しております。

2015 年 3 月 24 日

報道関係各位

日本能率協会グループ
広　報　委　員　会

第 4 回「ビジネスパーソン 1000 人調査」（英語力）

外国人と働くには「英語のコミュニケーションが最重要」と考えるも、実践できる人は 1 割にとどまる

8 割の人は英語力の維持・向上のためには「何もしていない」

外国人同僚の有無で意識に差。対策は、スキルアップ支援とモチベーション向上の両輪で

企業の人材育成やものづくり革新、調査・システム開発などの経営支援サービスを提供する日本能率協会グループは、このたび、全国のビジネスパーソン1000人に対して意識調査を行いました。この調査は働く人びとに焦点を当て、その時々の旬の話題をデータで紹介するシリーズです。

今回の調査から、外国人と一緒に働くには「英語でコミュニケーションをとれる」ことが重要と考えている人が最多（37.2%）なものの、実践できている人は1割（12.4%）にとどまることが分かりました。9割は仕事で英語を使う環境におらず、また、8割は英語力の維持・向上のためには何もしていないという、英語力と学習意欲に関しては心もとない結果が得られました。ただし、外国人同僚のいる人は総じて英語への意識が高く、過半数は「英語を使って仕事の幅を広げたい」と考えています。

経営のグローバル化が叫ばれる一方、現場のビジネスパーソンの意識が追い付いていません。グローバルに活躍するには、意思疎通のための英語が欠かせないのも現実です。企業側は、継続的なスキルアップ支援による語学力の底上げに加え、仕事で実践する機会を与える、外国人を採用し職場に刺激を促すなどのモチベーションを引き出す工夫も求められます。

※同調査で行った「仕事の生産性」（2015年1月22日発表）、「ダイバーシティ」（2015年2月10日発表）に関するニュースリリースも、ホームページ http://www.jma.or.jp/news で公開しています。

調査名称	第4回ビジネスパーソン1000人調査
調査期間	2014年12月1日（月）～8日（月）　8日間
調査対象	（株）日本能率協会総合研究所「JMAR リサーチモニター」のうち全国の 20 歳～69 歳までの正規・非正規雇用の就業者（企業や団体で働く正社員、役員、経営者、契約・嘱託社員、派遣社員。ただしパート・アルバイト、医師・弁護士などの専門職業、自由業を除く）
調査方法	インターネット調査
回答数	1,000 人（内訳：男性 556 人、女性 444 人）　※回答は小数点第 2 位を四捨五入

トピックス

1．4割近くが外国人と働くうえで重要なのは「英語でコミュニケーションをとれること」と考えるも、実践できる人は 1 割にとどまる。外国人同僚のいる人は、5 割が英語を重視。

2．9 割の人は「仕事で英語を使っていない」。
英語使用者の割合は、勤務先の従業員規模、年収に比例する傾向

3．外国人同僚がいる人の半数は「英語を使って仕事の幅を広げたい」。
一方、外国人同僚がいない人の半数は「英語を使って仕事の幅を広げたいと思わない」

4．8 割の人が英語力の維持・向上のためには「何もしていない」。
取り組んでいる人の学習法は「教材や書籍で独学」「英語でテレビ・映画視聴」など

【本件に関するお問い合せ】日本能率協会グループ　広報委員会（担当：亀山　TEL：03-3434-8620）
〒105-8522 東京都港区芝公園 3-1-22　一般社団法人日本能率協会内　Email：jmapr@jma.or.jp

１．４割近くが外国人と働くうえで重要なのは「英語でコミュニケーションをとれること」と考えるも、実践できる人は１割にとどまる。外国人同僚のいる人は、５割が英語を重視。

今回の調査回答者 1000 人のうち、職場で共に働く外国人（同じ会社内であっても、仕事上の接点がない人を除く）がいる人は 14.2%（142 人）、いない人は 85.8%（858 人）でした。

外国人と一緒に働くにあたって重要だと思うことを聞いたところ（複数回答）、1 位「英語でコミュニケーションをとれる」（37.2%）、2 位「自分の考えを主張できる」（29.8%）、3 位「国籍・人種・宗教の異なる人に対する抵抗感がない」（26.5%）でした。【図表 1】

上記と同じ選択肢が自身の態度・考え方にあてはまるか聞いたところ（複数回答）、1 位「相手のやり方を尊重する」（26.0%）、2 位「自分の考えを主張できる」（25.3%）、3 位「国籍・人種・宗教の異なる人に対する抵抗感がない」（19.7%）でした。外国人と一緒に働くにあたって最重要視されている「英語でコミュニケーションをとれる」は、12.4%にとどまります。【図表 2】

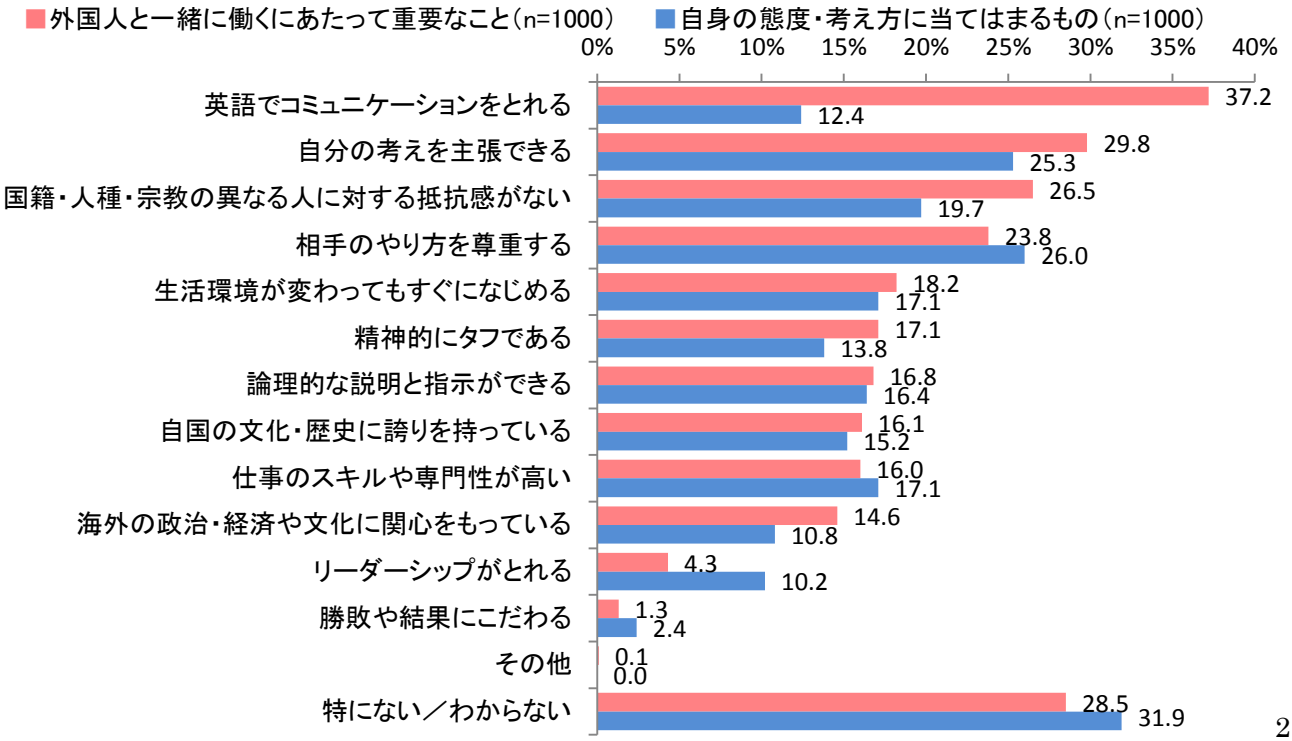
図表 1：あなたは、外国人と一緒に働くにあたって重要なことはなんだと思いますか。（あてはまるものをすべて選択）

全体（n=1000）

順		%
1	英語でコミュニケーションをとれる	37.2
2	自分の考えを主張できる	29.8
3	国籍・人種・宗教の異なる人に対する抵抗感がない	26.5
4	相手のやり方を尊重する	23.8
5	生活環境が変わってもすぐになじめる	18.2
6	精神的にタフである	17.1
7	論理的な説明と指示ができる	16.8
8	自国の文化・歴史に誇りを持っている	16.1
9	仕事のスキルや専門性が高い	16.0
10	海外の政治・経済や文化に関心をもっている	14.6
11	リーダーシップがとれる	4.3
12	勝敗や結果にこだわる	1.3
	その他	0.1
	特にない／わからない	28.5

図表 2：ビジネスパーソンとしてのあなた自身の態度・考え方に当てはまるものを教えてく ださい。（あてはまるものをすべて選択）　全体（n=1000）

順		%
1	相手のやり方を尊重する	26.0
2	自分の考えを主張できる	25.3
3	国籍・人種・宗教の異なる人に対する抵抗感がない	19.7
4	生活環境が変わってもすぐになじめる	17.1
4	仕事のスキルや専門性が高い	17.1
6	論理的な説明と指示ができる	16.4
7	自国の文化・歴史に誇りを持っている	15.2
8	精神的にタフである	13.8
9	英語でコミュニケーションをとれる	12.4
10	海外の政治・経済や文化に関心をもっている	10.8
11	リーダーシップがとれる	10.2
12	勝敗や結果にこだわる	2.4
	その他	0.0
	あてはまるものは１つもない	31.9



同設問を、職場で共に働く外国人（同じ会社内であっても、仕事上の接点がない人を除く）の有無別に比較すると、外国人と一緒に働くにあたって重要だと思うことは上位 4 位までは同じ項目が並びますが、回答率が大きく異なります。1 位の「英語でコミュニケーションをとれる」は、職場に外国人がいる人の 54.2%が重視していますが、いない人は 34.4%にとどまります。【図表 3】

回答者自身の態度・考え方については、職場に外国人がいる人もいない人も、トップ 3 は順位が異なるものの同じ項目がランクイン。職場に外国人がいる人は、1 位「自分の考えを主張できる」（42.3%）、いない人は、1 位「相手のやり方を尊重する」（25.2%）でした。「英語でコミュニケーションをとれる」は、職場に外国人がいる人で 5 位（29.6%）、いない人では 10 位（9.6%）となりました。【図表 4】

【職場で共に働く外国人の有無別】

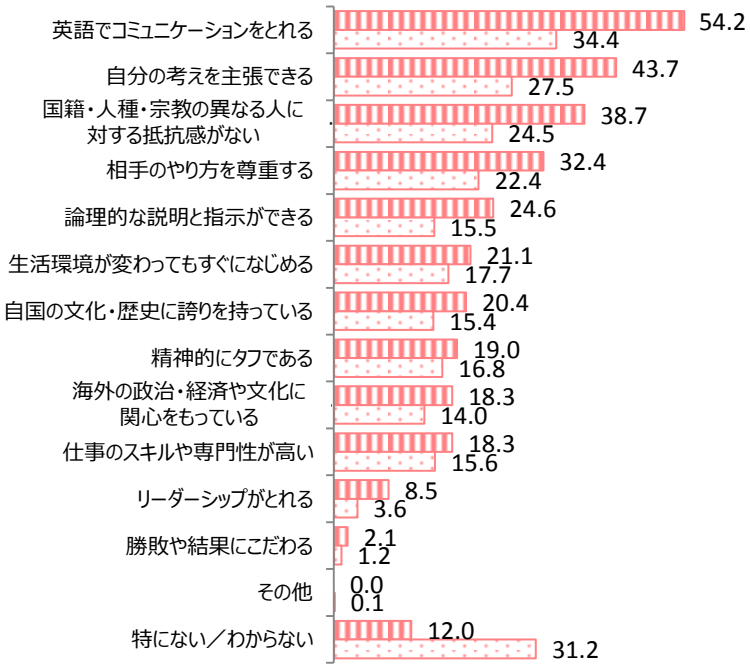
図表 3：あなたは、外国人と一緒に働くにあたって重要なことはなんだと思いますか。（あてはまるものをすべて選択）

職場に、共に働く外国人がいる人（n=142）

順		%
1	英語でコミュニケーションをとれる	54.2
2	自分の考えを主張できる	43.7
3	国籍・人種・宗教の異なる人に対する抵抗感がない	38.7
4	相手のやり方を尊重する	32.4
5	論理的な説明と指示ができる	24.6
6	生活環境が変わってもすぐになじめる	21.1
7	自国の文化・歴史に誇りを持っている	20.4
8	精神的にタフである	19.0
9	海外の政治・経済や文化に関心をもっている	18.3
9	仕事のスキルや専門性が高い	18.3
11	リーダーシップがとれる	8.5
12	勝敗や結果にこだわる	2.1
	その他	0.0
	特にない／わからない	12.0

職場に、共に働く外国人がいない人（n=858）

順		%
1	英語でコミュニケーションをとれる	34.4
2	自分の考えを主張できる	27.5
3	国籍・人種・宗教の異なる人に対する抵抗感がない	24.5
4	相手のやり方を尊重する	22.4
5	生活環境が変わってもすぐになじめる	17.7
6	精神的にタフである	16.8
7	仕事のスキルや専門性が高い	15.6
8	論理的な説明と指示ができる	15.5
9	自国の文化・歴史に誇りを持っている	15.4
10	海外の政治・経済や文化に関心をもっている	14.0
11	リーダーシップがとれる	3.6
12	勝敗や結果にこだわる	1.2
	その他	0.1
	特にない／わからない	31.2



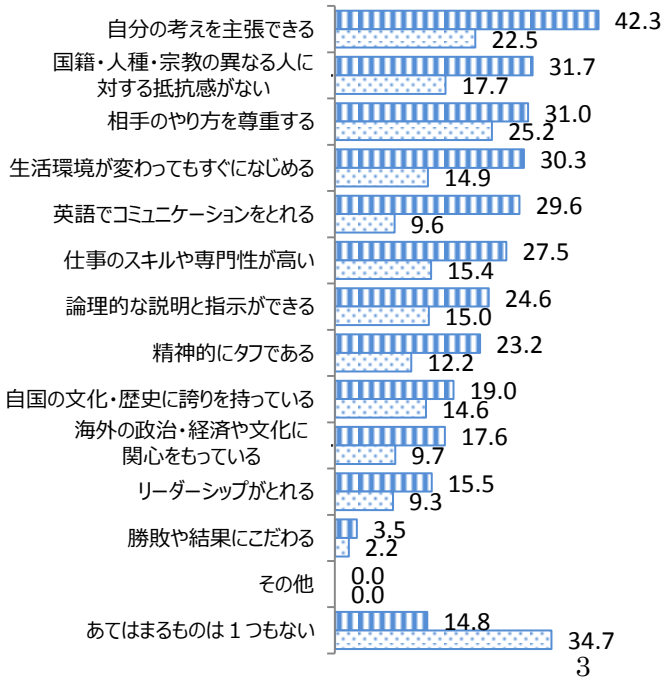
図表 4：ビジネスパーソンとしてのあなた自身の態度・考え方に当てはまるものを教えてく ださい。（あてはまるものをすべて選択）

職場に、共に働く外国人がいる人（n=142）

順		%
1	自分の考えを主張できる	42.3
2	国籍・人種・宗教の異なる人に対する抵抗感がない	31.7
3	相手のやり方を尊重する	31.0
4	生活環境が変わってもすぐになじめる	30.3
5	英語でコミュニケーションをとれる	29.6
6	仕事のスキルや専門性が高い	27.5
7	論理的な説明と指示ができる	24.6
8	精神的にタフである	23.2
9	自国の文化・歴史に誇りを持っている	19.0
10	海外の政治・経済や文化に関心をもっている	17.6
11	リーダーシップがとれる	15.5
12	勝敗や結果にこだわる	3.5
	その他	0.0
	あてはまるものは１つもない	14.8

職場に、共に働く外国人がいない人（n=858）

順		%
1	相手のやり方を尊重する	25.2
2	自分の考えを主張できる	22.5
3	国籍・人種・宗教の異なる人に対する抵抗感がない	17.7
4	仕事のスキルや専門性が高い	15.4
5	論理的な説明と指示ができる	15.0
6	生活環境が変わってもすぐになじめる	14.9
7	自国の文化・歴史に誇りを持っている	14.6
8	精神的にタフである	12.2
9	海外の政治・経済や文化に関心をもっている	9.7
10	英語でコミュニケーションをとれる	9.6
11	リーダーシップがとれる	9.3
12	勝敗や結果にこだわる	2.2
	その他	0.0
	あてはまるものは１つもない	34.7



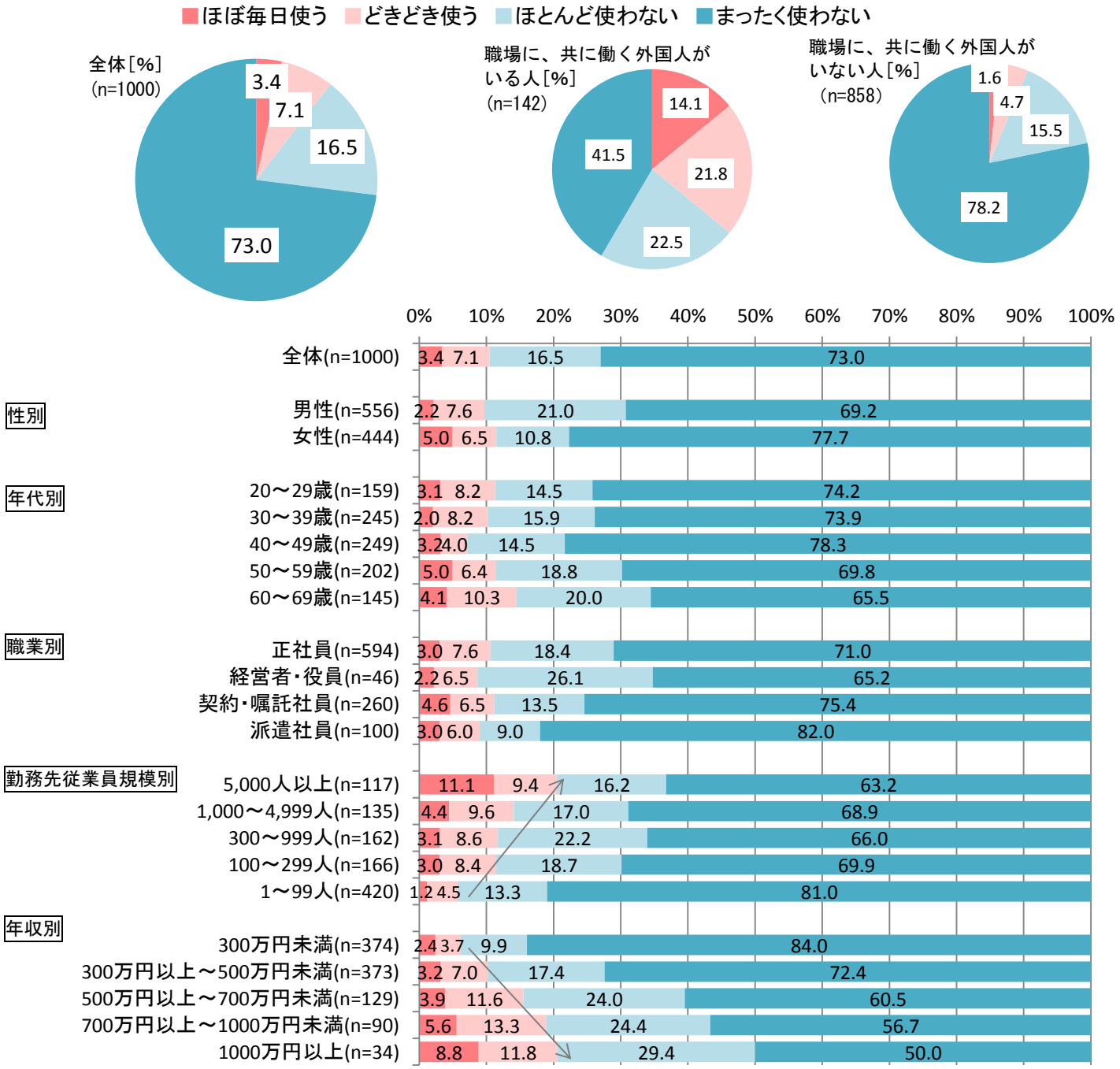
２．９割の人は「仕事で英語を使っていない」。
英語使用者の割合は、勤務先の従業員規模、年収に比例する傾向

仕事をする上で英語をどの程度使っているかを聞いたところ（単一回答）、「まったく使わない」（73.0%）が圧倒的に多く、「ほとんど使わない」（16.5%）と合わせると、約 9 割（89.5%）が英語を使う環境にいません。英語使用者は、「ほぼ毎日使う」3.4%、「ときどき使う」7.1%を合わせた 10.5%です。

職場で共に働く外国人（同じ会社内であっても、仕事上の接点がない人を除く）がいる人は、英語を使う人が 35.9%（「ほぼ毎日使う」14.1%、「ときどき使う」21.8%）です。一方、職場に外国人がいない人は 6.3%（「ほぼ毎日使う」1.6%、「ときどき使う」4.7%）と 1 割にも満たない結果になりました。

属性別にみると、勤務先の従業員規模が大きい（従業員数 5000 人以上の会社に勤めている人で 20.5%）、または年収が高い（年収 1000 万円以上の人で 20.6%）人の方が、英語を使用する傾向にあります。【図表 5】

図表 5：現在、仕事をする上で英語をどの程度使っていますか。（1 つだけ選択）



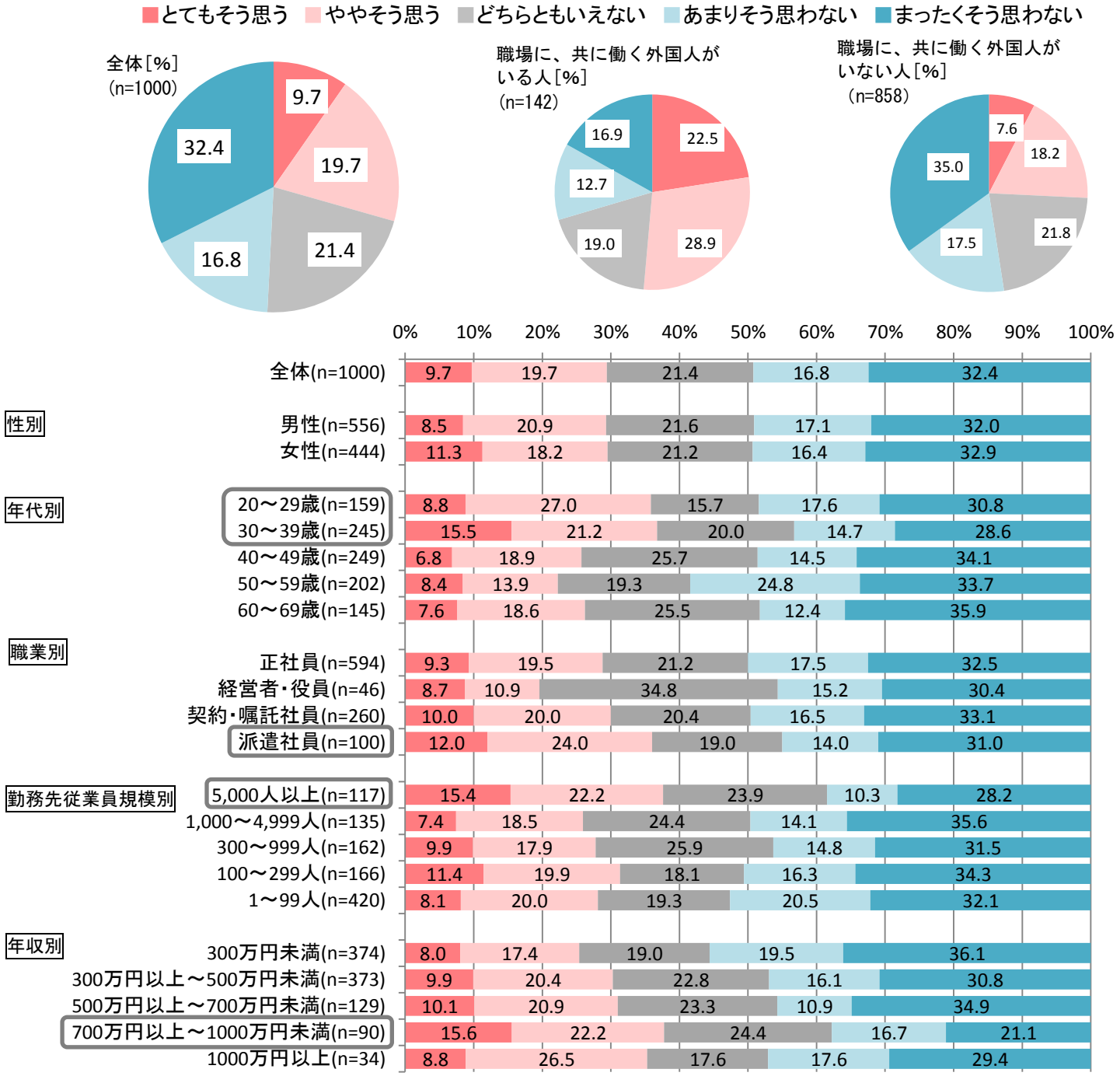
３．外国人同僚がいる人の半数は「英語を使って仕事の幅を広げたい」。
一方、外国人同僚がいない人の半数は「英語を使って仕事の幅を広げたいと思わない」

英語を使って仕事の幅を広げたいと思うかを聞いたところ（単一回答）、そう思う人は 29.4%（「とてもそう思う」9.7%、「ややそう思う」19.7%）、どちらともいえない人は 21.4%、そう思わない人は 49.2（「あまりそう思わない」16.8%、「まったくそう思わない」32.4%）でした。

職場で共に働く外国人（同じ会社内であっても、仕事上の接点がない人を除く）がいる人は、過半数（51.4%）が英語を使って仕事の幅を広げたいと思っています。しかし、職場に外国人がいない人では多数派が逆転し、52.5%が英語を使って仕事の幅を広げたいとは思っていません。【図表 6】

回答者の年代別にみると、英語を使って仕事の幅を広げたいと思っているのは 20 代（35.8%）・30 代（36.7%）に多く、そのほかの属性では派遣社員が 36.0%、勤務先の従業員規模 5000 人以上の人で 37.6%、年収 700 万円以上～1000 万円未満の人が 37.8%と最も多いという結果になりました。【図表 6】

図表 6：あなたは、英語を使って仕事の幅を広げたいと思いますか。（1 つだけ選択）



４．８割の人が英語力の維持・向上のためには「何もしていない」。
取り組んでいる人の学習法は「教材や書籍で独学」「英語でテレビ・映画視聴」など

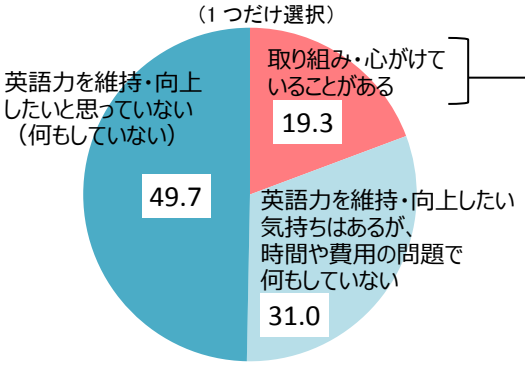
現在、英語力の維持・向上のためにどのようなことをしているかを聞いたところ（単一回答）、約半数が「英語力を維持・向上したいと思っていない（何もしていない）」（49.7%）、残りの３割も「英語力を維持・向上したい気持ちはあるが、時間や費用の問題で何もしていない」（31.0%）と回答し、８割の人が何もしていないという結果でした。

全回答者のうち２割（19.3%）は英語学習のために心がけている・取り組んでいることがあり、その内容（複数回答）は１位「英語教材や書籍で独学」（26.4%）、２位「テレビ・映画を英語で視聴」（24.9%）、３位「海外旅行」（21.8%）です。７位「モバイル端末向けアプリで学習」（10.4%）、10 位「オンライン英会話を習う」（6.2%）、11 位「外国人と SNS で交流」（4.1%）など、IT ツールの活用はまだ多くはありません。

職場で共に働く外国人がいる人の４割（42.2%）は、英語学習のために心がけている・取り組んでいることがあると回答。外国人同僚の有無が英語学習に対する意識の差につながっています。【図表 7】

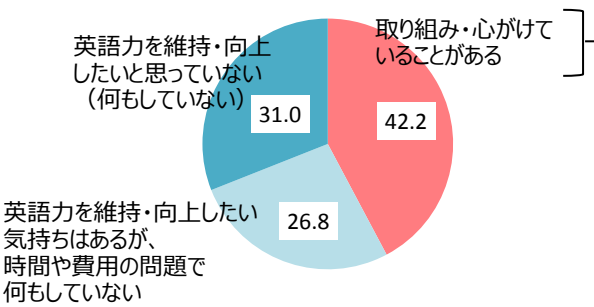
図表 7：現在、英語力の維持・向上のためにどのようなことをしていますか。

全体［%］　(n=1000)
（1 つだけ選択）



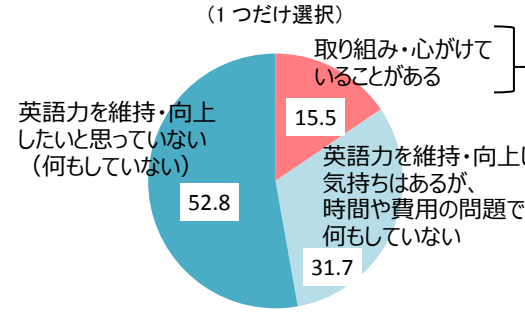
順	(n=193)（あてはまるものすべて選択）	%
1	英語教材や書籍で独学	26.4
2	テレビ・映画を英語で視聴	24.9
3	海外旅行	21.8
4	テレビ・ラジオの語学講座を視聴	21.2
5	資格試験を受験（TOEICや英検など）	16.1
6	外国人の友人をつくり交流（対面）	14.0
7	英会話教室に通う	10.4
7	モバイル端末向けアプリで学習	10.4
9	英字新聞や英字雑誌を読む	8.8
10	オンライン英会話を習う	6.2
11	外国人とSNSで交流（フェイスブックやツイッターなど）	4.1
12	その他	1.0

職場に、共に働く外国人がいる人［%］　(n=142)
（1 つだけ選択）



順	(n=60)（あてはまるものすべて選択）	%
1	英語教材や書籍で独学	31.7
1	テレビ・映画を英語で視聴	31.7
3	テレビ・ラジオの語学講座を視聴	21.7
4	外国人の友人をつくり交流（対面）	20.0
5	資格試験を受験（TOEICや英検など）	18.3
6	モバイル端末向けアプリで学習	15.0
6	海外旅行	15.0
6	英字新聞や英字雑誌を読む	15.0
9	英会話教室に通う	6.7
10	オンライン英会話を習う	5.0
10	外国人とSNSで交流（フェイスブックやツイッターなど）	5.0
12	その他	0.0

職場に、共に働く外国人がいない人［%］　(n=858)
（1 つだけ選択）



順	(n=133)（あてはまるものすべて選択）	%
1	海外旅行	24.8
2	英語教材や書籍で独学	24.1
3	テレビ・映画を英語で視聴	21.8
4	テレビ・ラジオの語学講座を視聴	21.1
5	資格試験を受験（TOEICや英検など）	15.0
6	英会話教室に通う	12.0
7	外国人の友人をつくり交流（対面）	11.3
8	モバイル端末向けアプリで学習	8.3
9	オンライン英会話を習う	6.8
10	英字新聞や英字雑誌を読む	6.0
11	外国人とSNSで交流（フェイスブックやツイッターなど）	3.8
12	その他	1.5

コメント

グローバル経営の重要性が増していますが、今回の調査では意思疎通を図るための英語力が心もとないビジネスパーソンが多い実態が明らかになりました。「英語ができれば国際人」という時代ではありませんが、グローバルに活躍できる人材を育成するには、英語の問題は避けて通れません。

回答者全体の傾向では、外国人と一緒に働くには英語でコミュニケーションがとれることが重要だと考えているものの（37.2%）、実践できる人は 1 割（12.4%）です。9 割（89.5%）の人が仕事で英語を使う環境になく、「英語を使って仕事の幅を広げたい」と思っている人も 3 割（29.7%）にとどまります。5 割（49.7%）の人は英語力を維持・向上したいと思っておらず、3 割（31.0%）の人は気持ちはあっても時間や費用の問題で何もしていません。英語でのやりとりの必要に迫られる状況にないため学習意欲が低く、行動につながっていません。

調査結果からは、外国人同僚の有無による英語への意識差がみられました。職場に外国人がいる人（142 人/1000 人中）は、外国人と働くうえで英語を重視する傾向がより強く（54.2%）、実践できる人も 29.6%と割合が高まります。 さらに、過半数（51.4%）は「英語を使って仕事の幅を広げたい」と思っており、4 割（42.2%）は英語力の維持・向上を意識しています。職場で外国人と接していることが、英語力と仕事上の成長を結びつけるモチベーションとなっています。

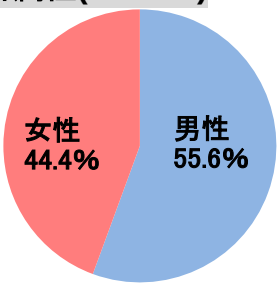
事業のグローバル化だけでなく、人材の多様性（ダイバーシティ）推進を目的とした外国人採用や、2020 年東京オリンピック・パラリンピック開催を追い風にした訪日外国人旅行者向けのインバウンドビジネス進展など、外的な刺激要因は高まっています。今後の環境変化によって、英語に対するビジネスパーソンの意識が変わってくることも予想されます。

英語力向上の取り組みとしては「英語教材や書籍で独学」（1 位・26.4%）、「テレビ・映画を英語で視聴」（2 位・24.9%）が上位でした。日常生活のなかで英語に慣れ親しむことに加え、ビジネスシーンで対応できる英語力を身につけるには、使用場面を想定した意識的な学習が効果的です。

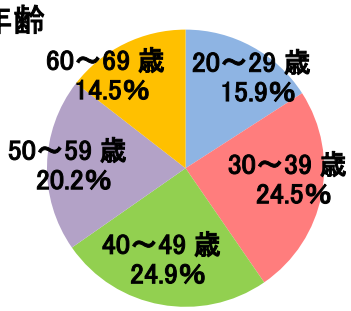
グローバル経営を加速させるには、事業の戦略性に加え人材の確保・育成が欠かせません。語学力底上げのための継続的なスキルアップ支援に加え、海外事業に挑戦させる、現地視察や赴任の機会をつくる、または外国人を採用し職場に刺激を与えるなど、モチベーションを引き出す工夫も求められます。

回答者属性(n=1000)

性別



年齢



職業

正社員	59.4%
契約・嘱託社員	26.0%
派遣社員	10.0%
役員	2.4%
経営者	2.2%

居住地

北海道・東北・北陸	11.9%
関東・甲信越	44.4%
東海	10.3%
近畿	19.3%
中国・四国	6.7%
九州・沖縄	7.4%

業種

農林水産業	0.3%
建設業	7.7%
製造業	21.6%
電気・ガス・水道供給	1.6%
情報通信業	5.4%
運輸業	5.0%
商社・卸売業	5.0%
小売業	6.7%
金融・保険業・証券	5.2%
不動産業	3.3%
飲食・宿泊業	1.2%
医療・福祉	6.1%
教育・学習支援	4.3%
広告・マスコミ	0.5%
官公庁・団体	5.2%
サービス業	17.1%
その他	3.8%

以上

【本件に関するお問い合せ】日本能率協会グループ　広報委員会（担当：亀山　TEL：03-3434-8620）
〒105-8522 東京都港区芝公園 3-1-22　一般社団法人日本能率協会内　Email：jmapr@jma.or.jp